



TITLE:

<書評> 小林善文著『近代中國における教育の普及と改革に関する研究』

AUTHOR(S):

蔭山, 雅博

CITATION:

蔭山, 雅博. <書評> 小林善文著『近代中國における教育の普及と改革に関する研究』. 東洋史研究 2004, 63(1): 119-125

ISSUE DATE:

2004-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/138120>

RIGHT:

小林善文著

近代中國における教育の普及と改革に 關する研究

蔭 山 雅 博

一 はじめに

筆者小林善文氏は後學の徒であり、不撓不屈の人である。大學卒業後、永く高校の教育現場にあった同氏は學問研究の道を斷ち切ることができず、一念發起、母校の京都大學大學院に進學された。同大學院博士後期課程を修了されて以降もポストにめぐまれず、大學の非常勤講師と高校の教諭職にあること凡そ十年、専任教員として大學に迎えられたのは四十五歳の春である。この間の經濟的困窮と精神的消耗の度合いは筆舌に盡くし難い。しかしながら、持ち前の強靱な體力と精神力を發揮して逆境に立ち向かい、よくこれを克服、優れた研究業績を相次いで發表されている。本書は、これらに加筆訂正してまとめたものであり、積年の汗と涙の結晶といっても過言ではない。

二 本書の全體像

(一) 本書の目次

序章 第一節 中國近代教育史研究の動向

第二節 本書の方針

第一章 初等教育の制度改革と運用情況をめぐって

第一節 清末から民國初期の初等教育

第二節 五四以降の初等教育の展開

第二章 初等教員の組合運動——一九二〇年代における——

はじめに

第一節 初等教員をとりまく環境

第二節 初等教員の組織と資格をめぐって

第三節 初等教員の經濟闘争をめぐって

小結

第三章 中等教育改革の理念と現實

はじめに

第一節 清末から民國初期の中學教育

第二節 新學制の制定をめぐって

第三節 學制改革の意義と影響

小結

第四章 北京大學の改革と蔡元培——改革の成果を守る闘いを中心に——

第一節 京師大學堂から北京大學へ

第二節 二〇年代前半の北大防衛闘争

第三節 二〇年代後半の北大防衛闘争

小結

第五章 女子教育の發展と論争

はじめに

第一節 清末から民國初期における中國女子教育

第二節 五四運動時期の中國女子教育

第三節 一九二〇年代の中國女子教育

小結

第六章 黄炎培と職業教育運動

はじめに

第一節 職業教育運動の成立

第二節 中華職業教育社の職業教育運動

第三節 職業教育運動における新たな道

第四節 鄉村建設運動と中華職業教育社

小結

第七章 五四時期の平民教育運動

はじめに

第一節 平民教育運動の發生

第二節 五四時期における運動の發生

小結

第八章 晏陽初にみる平民教育運動の鄉村への展開

はじめに

第一節 晏陽初と中華平民教育促進會總會

第二節 晏陽初と定縣の鄉村建設實驗

小結

第九章 陶行知にみる平民教育運動の鄉村への展開

はじめに

第一節 陶行知と平民教育運動

第二節 陶行知と曉莊師範——鄉村建設への道

第三節 陶行知と山海工學團——鄉村建設と教育

小結

第一〇章 梁漱溟にみる鄉村建設への道

はじめに

第一節 梁漱溟の鄉村建設構想の特色

第二節 鄉村建設理論の具體化をめぐる

第三節 鄉村建設の實態と意義

小結

終章

(二) 各章の要旨と論點

本書は全十二章を以て構成されているが、終章を除く各章とも獨立した論攷であることから、ここでは各章の要旨とともに、それぞれの論攷の論點についても觸れることとする。

序章は「改革・開放」政策下の近代教育史研究の動向を概観したものである。本書をまとめるに際し、あらたに書き下ろされた部分である。要點は以下のようである。

中國におけるここ數年來の近代教育史研究は、すでに従来の革命史に從屬する教育史研究から脱けだし、獨自な研究方法と對象を有する學問領域へと成熟している。こうした新傾向を準備したのは、陳學恂や朱有暉他の教育史研究者であり、『中國近代教育史教學參考資料』（陳學恂主編・全三冊）、『中國近代學制史料』、

『中國近代教育史資料匯編』（朱有璘主編・全七冊）等をはじめとする資料集の編纂・刊行が與つて力あった。その後、中國教育史學會は近代教育史研究の一層の深化を圖るべく、特殊テーマ別研究、地域別教育史研究、比較教育史研究、教育思想史研究に着手、その成果を相次いで世に問うている。『中國近代教育論叢書』（葉立群他編）、『中國近現代教育家系列研究』（遼寧教育出版社）、『中國教育近代化叢書』（田正平他主編）、『中國教育制度通史』（山東教育出版社）、『中國教育思想通史』（田正平他編）などのシリーズがそれである。

他方、中國近代教育史像の再構築を試みる研究も現れている。『中國教育史』（孫培青主編）、『中國近代教育史』（鄭登雲主編）、『中國近代學制比較研究』（金林祥他編）等がそれである。また、中國近代教育史上の空白部分である民國教育史の解明にも力を入れていくようで、『民國教育史』（李華興主編）、『中國民國教育史』（馮開文著）、『民國時期的教育』（何國華著）等の注目に値する研究成果がすでに刊行されている。これらの研究は共通して「解放」前中國における近代教育史研究の蓄積を尊重する姿勢が見られる。

もつとも、すべての中國教育史研究書がこうした新傾向を示しているわけではなく、従來の教育史概説書と同様、革命史の論理で教育史を敘述するテキストも未だ少なくない。王炳照（北京師範大學教育系教授・大學院指導教授）主編の『中國近代教育史』はその典型的事例である。

さらに、日本における中國近代教育史研究の動向を見ると、阿部洋により『中國近代學校史研究——清末における近代學校制度

の成立過程』（一九九三年二月 福村書店）が刊行されて以來、中堅・若手研究者の中國近代教育史研究は大いに進展した。それ以後、若手・中堅研究者により本格的な學術書が相次いで上梓されている。それらのうち特に注目すべきは、周一川（『中國人女性の日本留學史研究』）、汪婉（『清末中國對日教育視察の研究』）、熊達雲（『近代中國官民の日本視察』）等の留日中國人研究者であり、彼らの眞摯な研究活動はやがて中國における近代教育史研究に好影響を及ぼし、日中間の學術交流を一層緊密化することになる。

以上から理解されるとおり、序章の論述は中國におけるここ數年來の近代中國教育史研究の紹介にとどまるものではない。研究動向の交通整理をとおして著者の教育認識の枠組みと中國教育史上の時期區分のあり方に關する見識が示されている。中國近代教育史研究にとって、中國近代史上の時期區分（清末期・辛亥革命期・五四時期・國民革命期）は有效であるかどうか、各時期の教育現象を多角的且つ構造的に捉えることができるかどうか、中國教育法制史上の時期區分（欽定學堂章程・奏定學堂章程・壬子學制・壬戌學制・戊辰學制）との關係はいかにあるべきかなどを視野にilleた動向研究であり、そこには中國近代教育史研究上の古くて新しい問題が再提起されている。

第一章は、初等教育普及事業に伴つて發生する制度問題を取り上げたものである。周知のとおり、中國近代において新式學校を地域社會に根付させることは困難であった。軍閥混戦が續く民國期においては、ハード面を整備するための教育經費を確保することも困難な狀況にあったが、民衆に學校という制度（スクールシ

システム)に對する理解を求め、子供に就學の機會を提供することはさらに困難な狀況にあつた。學校運営に必要不可欠な教育經費を民衆から徴収するためにはどのような方策を講ずるべきか、就學率を高めこれを維持するためにはいかなるシステム上の工夫が必要かなど、解決すべき問題は枚舉に遑がないのである。本論攷は、初等教育普及問題の研究目的とは、スクールシステムが地域社會との様々な摩擦のなかで様態を變えてゆくプロセスとその意味の究明にあることを提起したものと捉えることができる。これは、統計上の數字をもつて初等教育の普及狀況を短絡的に説明しようとする近年の教育史研究に對する警鐘でもある。

第二章は、民國期の學校教員の經濟生活と教育活動を取り上げ、それぞれにおいて必要最低限の糧と條件を獲得するべく、彼らが經濟鬭争と教育鬭争に突入してゆく過程を克明に描いたものである。軍閥による政治支配が永く續くなか、中國教育界は中央政府・地方政府と一定程度の距離を保ちながら、時には敵對關係にあつて、教育條件の整備と最低限の生活の保證を求める獨自な動きを展開していたが、彼らがたどり着いた最終手段は「組合」の結成であり、連帶して經濟鬭争と教育鬭争に勝利することであつた。近代中國における初等教育普及事業の核心を描いた勞作と言える。

第三章は、中等教育の普及過程を理念と現實の両面から明らかにしようとしたものである。近代學校制度における中等教育問題、即ちその位置づけと役割に關する問題は洋の東西を問わず後手に回される傾向が強く、未解決狀態にある。今日においても非先進諸國・開發途上國では“Secondary Education for All”をスロー

ガンに、この庶民への開放と普及を求める運動が展開している。近代中國においても狀況は同様であり、初等教育と高等教育の整備・擴充が常に優先され、中等教育の整備・擴充のために費やすことの出来る時間的、財政的餘裕はなかつた。本論攷では、民國政府の提供する中等學校(制度)と一般民衆が求める中等學校(制度)の乖離狀況に着目し、これの分析をとおして中等教育の整備が近代中國において困難を極めた近因と遠因を論じている。

第四章は、中國を代表する高等教育機關・北京大學を取り上げ、校長蔡元培の大學觀(大學の理念と運營のあり方)、および學問觀の特色を明らかにしながら、北京大學が近代大學として整備・擴充されてゆく過程を明らかにしたものである。もともと、近代大學として再出發した北京大學の改革事業を永く支えていたのは代理校長に就任した蔣夢麟である。本論攷においても蔣夢麟の事績は言及されている。しかしながら、本論攷では蔣の近代中國大學史上における位置と役割が議論の對象にされることはなく、蔣の事績をとおして蔣元培のめざしていた大學改革の内實に迫ろうとする姿勢が示されている。今後さらに、こうした觀點からの研究が進み、歴代校長の大學改革事業の實態が明らかになれば、蔡元培の構想した近代大學の全體像を描くことも不可能ではなからう。

第五章は、中國近代における女子教育の創始と、その後の展開狀況を明らかにしたものである。資料的制約を受けながらも、中國の傳統的女性觀が女子教育の創設事業に際し、どのような意味において障害となっていたのか、まずこの點が明らかにされている。創始以後の女子教育は順調に進展したわけではなく、むしろ

財政問題をはじめとする様々な苦難が待ち受けていたこと、啓蒙活動を進めたにも関わらず、一般民衆の女子教育に對する理解が得られなかったこと、女子教育問題を全面的に解決するためには中華人民共和國の建國を待たなければならなかったことなどが論じられている。

第六章は、中國近代の一時期に顯著な動きを見せる職業教育運動を取り上げ、これが民衆とその子弟に生きるための糧を提供する一方、教育破壊をくい止める最善の方策であったことを論じたものである。本論攷において注目すべきは、黃炎培の職業教育思想と自ら設立した中華職業教育社の職業教育普及運動を民族産業の發展との關わりにおいて論じている點であろう。また、必要最低限の教育經費を確保すべく、黃炎培と中華職業教育社の展開した地道な教育活動の足跡が詳細に掘り起こされており、この點も特筆に値する。

第七章は、五四運動と前後して展開した識字教育運動を中核とする平民教育運動を取り上げ、その發生経緯と展開状況、およびその限界を明らかにしたものである。本論攷では、識字教育運動を擔った北京師範大學と北京大學の學生にスポットを當て、各個別々に實施された識字教育の内容と方法、および民衆の受け止め方の位相を明らかにすることをとおして識字教育運動の果たした役割とその限界に迫っている。

第八章は、平民教育運動のリーダー的存在であつた晏陽初を取り上げ、平民教育運動の限界を克服するべく、晏が平民教育運動から鄉村教育運動への轉換を圖るに至つた経緯、および鄉村教育運動の特質を明らかにしたものである。本論攷では、晏陽初が平

民教育運動の挫折の要因を、農村の疲弊状況を省みず、教育家がそれぞれの理想とする識字教育を強行に推し進めたことにあると認識し、やがて農民と生活を共にしながら、識字教育のあり方を農民の希求する鄉村建設との關わりにおいて模索するに至る経緯が明らかにされている。歐米教育に精通し、近代教育の導入に積極的であつた晏陽初の意識改革の過程を伺うことができる。

第九章は、「中國近代教育の父」と仰がれる陶行知を取り上げ、多岐にわたる陶の教育活動のうち異彩を放つ識字教育運動の實態を明らかにしようとしたものである。周知のとおり、陶行知の教育思想や教育實踐に關する研究は、日中兩國の研究者によつて積極的に進められてきた。いずれの研究も概して陶行知の識字教育運動と教育實踐に對する評價は高い。本論攷では、こうした從來の陶行知像や評價にとらわれることなく、陶の推進した識字教育運動、および實驗學校で展開した教育實踐を晏陽初や梁漱溟のそれらと比較することをおして、陶行知の識字教育運動や教育實踐の性格と特質に迫り、從來の陶行知評價の相對化を圖ろうとしている。

第一〇章は、鄉村建設運動の推進者として著名な梁漱溟を取り上げ、鄉村の基層を確立するためには農民に對する識字教育や子弟に對する一定程度の初等教育が必性不可欠であることを認識し、獨自な理論にもとづいた鄉村教育を實踐するに至る経緯を明らかにしたものである。本論攷では、農民の學校制度（スクールシステム）に對する不信感と中國固有の私塾制度（教育システム）に對する信頼感を目の當たりにして、梁漱溟が民意の反映される學校制度や教師と生徒の人間的觸れ合い、および相互學習や自學自

習を重視する學校教育（鄉村教育・コミュニティスクールシステム）を構想してゆく姿を描いている。

三 本書の特色と今後の研究課題

すでに本書を構成する各章の論點を指摘したが、あらためてこれらをまとめると本書の特色と今後の研究課題は次のようになる。

（一）第一章―第五章（前半部分）と第六章―第一〇章（後半部分）では論調（トーン）が微妙に異なっているように思われる。前者では、中國近代における教育普及の歩みを教育運動史、あるいは教育闘争史の立場から論述されている。教育普及事業の過程において、理想と現實のギャップに苦しむ一方、これの解消と克服を求めて權力と格闘する教育者の姿に光が當てられている。従來の中國近代教育史研究には見られない斬新な手法ではあるが、ややもすれば教育普及事業を達成するための唯一の手段が權力（政治）に對する闘争（政治）にあるとする體制還元的な論攷と受け止められがちである。教育者による「組合」活動を論ずる際にも、教育の内的事項に關する「組合」内での議論をできる限り言及して頂きたかった。

後者では、劣悪な教育環境のなか、様々な教育家や教育者によって展開される教育普及事業とその成果の位相、およびそれぞれの限界が論じられている。そこでは、教育普及事業に功績のあった教育家や教育者の事績が彼らの思想信條や政治的立場の違いを越えて客觀的に捉えられている。ここ數年來、中國教育界は近代教育家や教育者に對する評價の見直し作業を進めているが、本書はこれに左右されることなく、努めて客觀的な評價を下している

ように思われる。⁽²⁾

（二）本書の目指すところは、獨自な中國近代教育史像の再構築にあると考えることができる。序章はそのための基礎作業である。そこでは、教育事象をより多角的且つ構造的に捉えるためには中國教育法制史上の時期區分を中國近代政治史上の時期區分に組み入れるべきか、中國近代政治史上の時期區分を中國教育法制史上の時期區分に取り入れるべきか、そのあり方が模索されている。今後、思索が一層深まることを期待したい。

（三）中國近代教育史像の再構築、即ち從來の中國近代教育史の認識枠組みの捉え直しをするために、教育制度（教育理念）史研究から教育實態史研究への轉換を求めているように思われる。教育者と兒童生徒（非識字成人を含む）の間で展開する日常的教育營爲こそが教育史研究の對象であり、こうした研究の積み重ねがあつてその時期の教育の質と量、即ち教育の全體像を捉えることができるという發想が伺われる。著者の永年にわたる様々な教育經驗がこうした發想を醸成したのであろう。極めて重大な提言であるが、本書の各論攷とも日常的教育營爲に關する敘述は概して淡泊である。

（四）各章を構成するいずれの論攷も、教育事象に關する因果關係の説明が精緻である。教育事象の發生経緯、その後の展開と結果をできる限り克明に追求する姿勢が顯著である。論攷の精緻さを高めるべく、本書は當該時期に發刊された各種「新聞」記事を積極的に活用している。「新聞」記事について言えばこれも洋の東西を問わず、今昔を問わず、偏向や誤報が少なくない。これを理由に研究者は「新聞」記事の活用を嫌忌する傾向にある。しか

しながら、本書は「新聞」記事の活用の際には細心の注意を拂い、信憑性のある生きた情報であることを確認したうえで、これを最大限活用し、論攷の精緻さを高めているようである。「新聞」記事の信憑性を得るまでの他者には目に見えない根氣強い作業には敬意を表したい。

(五) 手堅い實證研究であるが故に、本書は初學者にとつても様々な點において良きお手本となっている。ここ數年來、中國教育史研究を志す大學院生や若手研究者は微増傾向にあり、喜ばしい限りではある。しかしながら、彼らのほとんどは中國現代教育史研究、あるいは現狀紹介や現狀分析に力點を置く現代教育研究に集中している。中國前近代教育史、あるいは近代教育史研究に取り組む若手研究者は決して多くはない。その理由は、高校の國語教育はもとより大學の學部教育において、中國の古典や近代文書(時文等)を讀解する機會がほとんど提供されず、従つて中國の古典や近代文書の讀解能力が育成されていないからである。そのため、中國近代に興味關心はあるもののこれを敬遠する傾向にある。また、中國近代教育史研究を志している數少ない若手研究者の讀解能力も決して十分ではない。本書は、近代文書の「書き

下し」文や現代語譯、および近代文書の引用の仕方など、いわゆる實證研究の作法が隨所に示されており、この點において本書は特に良きお手本となっている。

註

(1) 「改革・開放」政策下の中國における中國近代教育史研究の動向については、以下の論攷がある。田正平「中國における教育史の研究動向」『國立教育研究所研究集錄』第二一號、一九九〇年九月、九七～一〇八頁。拙稿「教育史における時代區分と教育の認識枠組みの問い直し」『日本の教育史學』第三五集、一九九二年一〇月、二二七～二三二二頁。

(2) 本書とこれを構成する各章の舊稿を詳細に比較検討し、本書の特色と刊行の意義を論じたものに高田幸男の書評がある。『アジア教育史研究』第一二號(二〇〇三年三月)を参照されたい。

二〇〇二年二月 東京 汲古書院
A五判 四九四頁 一五〇〇〇圓